屋根概説（三）

藤田元春

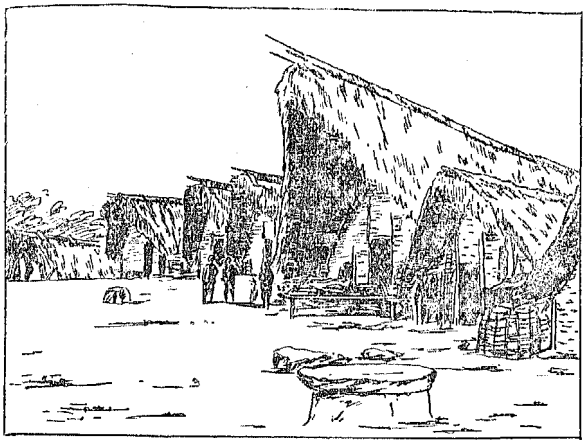
六、片入母屋造

神社建築の一樣式に春日造といふものがある、奈良朝以前の神社は大社造乂は大鳥、住吉いづれも切妻妻入を本體とするか、然らざれば伊勢の大神宮に見るがごとき神明造と稱する切妻平入の社殿であつて、純正素朴なる點に於て各其特色を發揮してゐる、やがて平安朝の初期まで下るとこの大社造系から春日造なる形式が現はれて春日神社の社殿となり、神明造系から流れ造と稱する樣式が現はれ京都上下加茂神社の社殿となつた、何れも本宇の外方に向拜を附加したもので參入に際して雨などを除けるための必要が生んだものであるらしい、かやうな神社建築の上に現はれた屋根の變化と同樣の變化が我國民家の上にも前後して出現したと見えて相類似した屋根が共通に存することは見逃してはならぬ現象である。

そこでこの春日造に類似した片入母屋建とも稱すべき民家の屋根の出現してくる順序を考へると、其の根源は古い民家の切妻妻入から系統を引くものである、元來切妻の妻入といふ形式は尤もプリ

ミチーブなものであるが、入口の上方に少しでも雨除がある方が實用上都合もよく外觀もよいから古くは妻の上方を前方に斗出さしたものと見え、現に丹波の田舍では入母屋造になつても猶古い棟の出張つた切妻をのこしてゐるのがある、丁度これに類した切妻の家の埴輪が武藏國大里郡畠山、下野國下都賀郡稻葉村等から出土した、それは大和佐味田發掘鏡背の畫や大橋氏の銅鐸の模樣にある切妻と共に何れも古代に切妻の棟が斗出してゐたのを示してゐる、これたのである、春日造といふものはこれで、工業大辭書に曰く

第十二圖



茅葺妻入
アッサムナガの民家

春日造は大社造系の社殿の前に向拜を附し本宇の屋根と向拜の屋根とを連絡して一種の形式を大

を今日實際につくつてゐるのは、例令ば南洋バラオの土人の集合所のごときもしくはアッサム、プラマプトラ河岸ナガ丘陵地の民家附圖第十二の如きものであるさてかやうに屋根の妻の上方を斗出さすことの代りにこれを引込めて、今度は妻の前方に片流れの庇を附加することを工夫するに至つ

成したるものなり。

とある、そこで正面に切妻の搏風が見えて妻の入口の上には流れの屋根があるが裏の方は切妻のまゝに殘されてゐる、こういふ風の屋根にすると其結果、大棟の外に前方に二つ丈け角棟(スミムネ)が出來て、前の流との間に三角形の破風抓格子(ツマゴウシ)の置かるべき空間が出來る、或は縣魚を垂下したりしてある塲所が出來る、もしこの前方の流れを裏口にもつけるなれば、それが即ち入母屋造となるから、この春日造を假りに、片入母屋造と呼んでもよからう。

この片入母屋造は其發達が元來切妻妻入の前方に向拜風の雨除けをつけたのであるから、當然妻入を本體とする、然してこの片入母屋妻入の民家が非常に近畿に多く分布してゐるといふことは面白い現象であると信ずる、入母屋に發達する以前の段階にあつた家屋の古式が古い文化の地方にのこるといふことは敢て異とするに足りない、

然らば其樣な所が何所にあるかといふに、山城國葛野郡嵯峨の一區を其第一の例として數へうる、大覺寺附近の民家に妻入のものが多く、表から見ると全く入母屋の妻入であるが裏へ廻ると切妻である、北嵯峨の舊村長井上與四郎氏邸宅の如き其分家三宅忠一氏の邸宅の如き其好標本である、(後節つのや參照)この形式の分布は重に五畿內の國々であつて、西は攝津から東山城の間で三島葛野乙訓の三郡に殊に多い、高槻驛から山崎までの間、汽車の沿道に餘程立派なこの屋根がある、向日

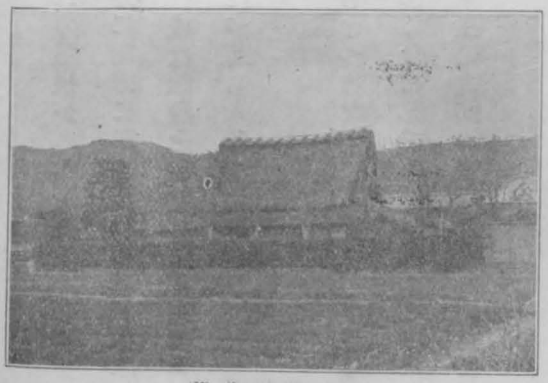
町まできてもまだある、淀川を界として南には大和造りの切妻が多いが、それでも其間所々にこの屋根があり北にはこの春日造が多く分布して特色を發揮する、丹波や近江に出るとこれがない、

京都市に現存せる茅葺の屋根で淨土寺眞如堂町に北向に橋本英太郎氏といふ家主の邸がある、安政五年頃に建てた家である、五間四面の粗末な平入であるがやはりこの片入母屋造で、第十三圖の如く一方に搏風があつて竹の抓格子になつてゐるのに、片方は切妻で誠に無雜作に板があてゝあるに過ぎない、思ふに元來この建前では道路に面して妻入であつたものが後に平入になつたのであらう予は大和國高市郡坂合村字越の區長松本善一氏の宅に於てこの片入

第十三圖

片入母屋茅葺
眞如堂町橋本氏宅

第十四圖



片入母屋茅葺
北嵯峨三宅忠一氏宅

母屋平入の好例を見た、奈良縣のことであるから茅葺と「瓦葺の火袋」との間、に防火壁の高塀があるから其の方は切妻であるのに對して(東)、他の一方(西)は入母屋にしてあつて、棟の針目覆が十八もある、平入八間四面の宏大な家であつた。

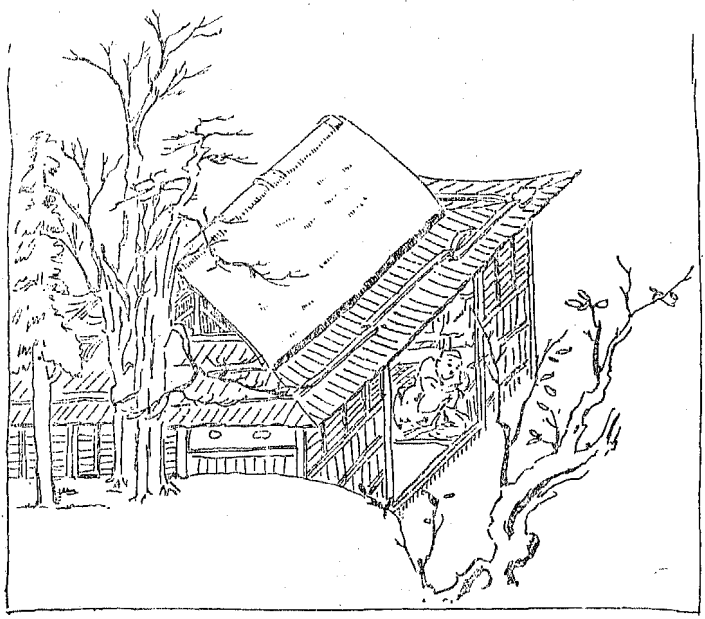
大和には入母屋の民家の外に瓦葺切妻俗に土造といふものがあり、塀作り茅葺の切妻及たゞの切妻茅葺の外に、又この片入母屋作りが混じて農村の特色をなしてゐると見え、大正十四年の國展に三石紅樹氏が奈良の白毫寺村風景として出品された日本畫は、實にこの片入母屋の家を描出したのであつた、蓋し五畿内諸地方に於てよく見る所の一形式である。今氏の日本の民家によれば秩父の山の奥の奥にもこの形があるといふことだ、思ふにこれは庶民が入母屋の形の寢殿に類似するを避けて、この形を取つたか或は、春日社の形に憧れてこの風にしたか、或は切妻より入母屋への過渡期の形をのこしたか、何にしても民家にのみ見る所の一種の屋根である、北河内郡交野村私部の矢寺治郎兵衛氏の本宅は瓦葺であつて、樓烟出しづきであるがやはり七間四面の片入母屋であるから、茅葺のみのものでもない、この種の邸宅は遠くから見てよい景色になるものである。

七、入母屋造

片入母屋のかはりに、切妻の前後に二つの流をつけると、角棟(スミムネ)が前後について四つになり、其上に切妻の搏風を置くことになる、これを入母屋造といひ、山城、大和、河内、和泉、攝津から丹波、

丹後、播磨、近江の南部から西部及北部といつた近畿一般の民家にはこの種の茅葺又は瓦屋根が多い、これも妻から入るのが古い習慣で南桑田郡龜岡附近ではこれをマヤと稱し、平から入る場合にはこれをヨコヤと稱して區別してゐる、或は平入とも云ふ。蓋しマヤは眞屋で切妻の妻入であつた時代の古い傳統を傳へてゐる語で、この事に關しては地球第五卷四號拙稿「京都市内に殘存せる古代の聚落」の中に詳論したから今之を再記することを避けるが、京都市平野宮北町に殘存せる茅葺民家は實にこの切妻妻入の形で流石は古い都であると思ふ。現に北嵯峨の三宅忠一氏邸とか、眞如堂横の橋本氏邸宅が片入母屋妻入であるのによつても其古さが偲ばれる。（前章參照）

第十五圖



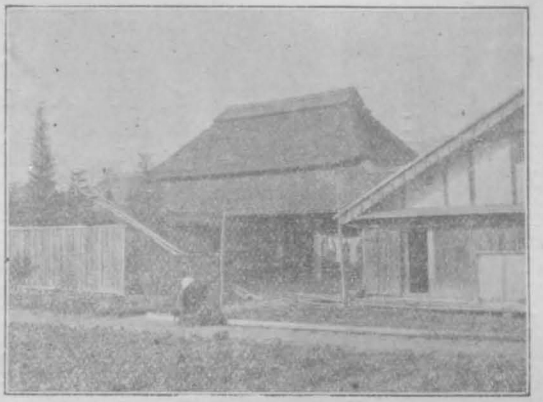
入母屋しころ葺
西行物語畫卷　嵯峨野寺後の景

工業大辭典屋根の條には、この入母屋を以て日本特有の樣式であると迄記してゐるのであるが、實際は必しも左樣でないことは後述する通である、けれども今日我國に現存する入母屋のすべてが、切妻妻入に庇をつけて後に起つた形であるや否やに至つては大に議論の餘地がある。

西紀一三一二年正和年代に書かれた畫工經隆の筆になる西行物語の繪卷物嵯峨野の寺後の景の寫生に出てゐる塔頭らしい建物を見ると、切妻茅葺の下に板葺の四方しころが出てゐること附圖の如くである、この圖の板葺の所を茅葺にすれば明に現在嵯峨邊に存する入母屋になるのである、さてこの種類の入母屋は、元來が切妻の母屋を本體とするから、其の棟の長さは母屋の長さに等しい、それは朱子文集に厦屋、則前五間後四間、但前五間皆横棟ヲナス、横棟盡ル所板アリ下垂ス、之ヲ搏風ト云フとある通りで、近畿地方の所謂入母屋は横棟は其家の母屋の長さ丈あつて、これに半間の庇がついて、その庇の分が入母屋形になるのである。併し我國にはかく切妻から出發しないで、四阿から出發した入母屋がある、朱子文集に從へば四阿、殿五間五面、中三間一棟ヲナシ、横ニ東西ヲ指ス、此所ヨリ分レテ四棟ヲナス即四隅ヲ指ス四阿ナリとある通り四阿は例令ば間口五間の家に對して頂上に三間の大棟しかない。

そこでもし切妻から入母屋になる場合には棟は間口五間に對して五間の棟となるけれども、もし四阿から出立して入母屋になる場合には、間口五間に對して三間の棟となるから棟が短かく、庇の分

第十六圖



瓦棟四阿茅葺
滋賀縣西大路村

が深く前後一間丈け母屋に喰込むことになる、奈良市の新藥師寺本堂の入母屋は、實に七間五面の堂であるが大棟は五間しかなくて左右一間づゝは隅棟の下に入つてゐる、即ちこの文の通りに四阿から入母屋に變つた堂であるから、これを他の多くの寺院に比べて屋根の形が何となく無格好に見える、蓋し半間の庇あるべき所に、一間以上の庇がついてゐるからである、しかし古建築物にはこの種の入母屋が少からずある、丁度この新藥師寺の入母屋の如く元來四阿から變化した入母屋が、滋賀縣の蒲生神崎甲賀三郡の東部丘陵地に分布してゐるのである、先日この方面に旅行した時瓦棟四注の茅葺を見たのであるが、大棟が短かく側面がふかく入込でゐるので、搏風

第十七圖

瓦棟入母屋茅葺
大阪府河內門眞村

を山城邊の民家のやうに大きく取ることが出來ない、一寸見ると似てゐるが、よく見ると同じ瓦棟でも山城邊では瓦棟の下に茅の妻が出て抓格子が入つてゐるが、蒲生郡では瓦棟が箱形に棟を包んで妻格子がない、而して別に棟のすぐ下に烟出しの穴がつくつてあるのもあれば、極めて小さい千鳥破風の類を備へてゐるのがある、一見入母屋に類してゐて實は全く違つてゐる、附圖第十六圖は蒲生郡西大路村字藏王古澤氏の邸で向て右の側に烟出しがあつて入母屋に類するけれども、これは元來四阿から出立したものであることは同じ瓦棟でも附圖第十七圖(河內國門眞村民家)と比較して一見諒解し得られるであらう。

故に入母屋に就て論ぜんとするものは、よくこの點を考へて棟の長さの、母屋に對する比長と、其搏風の大小を注意せなくてはならぬ、ことに面白いのは、蒲生又は甲賀の東部より西の方山城へ近づくにつれて、この搏風が漸次小から大になり、簡單な間に合せから正確な破風になつて終に京都附近の抓格子に移りかはることである、予はこの點から四阿の分布を考ふるに當つて一應この種の入母屋をも其考量の中に加へんとするものである。

さて我國に於て入母屋のあるのは餘程古いことで、高橋健自氏の上古の家屋によれば、埴輪や鏡の模樣に既に入母屋の形がある、又日本最古の古建築として自他共に誇る所の法隆寺、推古十五年、(西紀六〇七)の創立のそれは入母屋重屋である、或は火災にあつたといふが、有名な玉蟲厨子は推

古十五年には現存してゐたので、それは慥かに入母屋しころぶきである、古い過去現在因果經の圖に既に入母屋があるから、この形は必しも日本の發明でなくて、支那にもあれば朝鮮にもあるのである、我國では天平時代になつて、殿堂に四阿造が現れたことはさきにのべた通りであるが、それよりも古い飛鳥時代の法隆寺は入母屋であつた、思ふに欽明天皇の二年始めて遣唐使をつかはし唐風を學び、當時初唐復古の風に從つて、宮殿は四阿を重んじたのであらうが、四阿は屋根に變化がなく、見る眼には入母屋の搏風のある方が美はしい、故に支那でも傳統を重んずる、北京禁紫城内の正殿たる保和殿は四阿であるけれども、其他の宮殿をはじめ正陽門、崇文門等の樓閣はすべて入母屋重屋である、孔子の廟である曲阜の大成殿も入母屋重簷であつて、支那至る所でこれを廟宇に見るが、朝鮮迄くると京城の東大門及南大門は四阿であるのに、景福宮の勤政殿、慶會樓、昌德宮の仁政殿、昌慶宮の明政殿、いづれも正殿が入母屋で、支那とは逆になつてゐる、日本では家屋雜考に寢殿は四阿とあり又其の繪畫も四阿にしてあるが、今日我等の知る限に於て、京都御所の紫宸殿や清涼殿、小御所等、九重の奥深くして窺ひがたき所もやはり入母屋である、奈良の唐招提寺の講堂は寧樂都の朝集殿であつて、古の奈良京の宮殿建築を知る好資料であるが、これ又九間四面の本瓦葺入母屋造である、してみると寢殿は必しも四阿とは限らないで入母屋は四阿に准じて重んずべき家作りであつたと見ねばならぬ、春湊浪話に

昔の寢殿をつくる六間あり又四間ありとなり、武家もこれをうつし足利成氏の時造くりし殿宇の圖今も世にのこれり、六間四方也、寺の方丈といふものは多くは六間の寢殿作り也

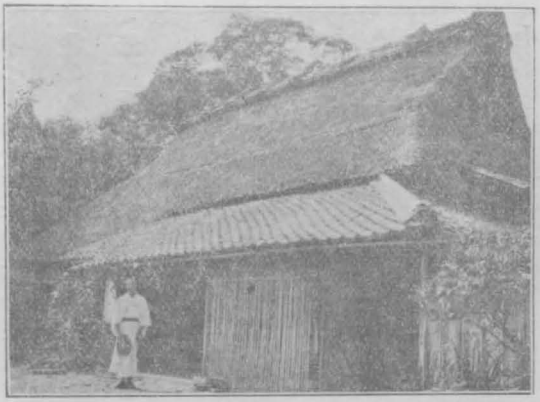
とあるがもし果して武家のつくつた殿宇も古の寢殿を摸して作くつたものとすれば、昔の寢殿は必しも四阿でなくて入母屋造のものもあつたのであらう、宇治の平等院は關白頼通の邸であつたが、今日見る通り鳳凰堂は入母屋である、平等院の扉の畫には瓦棟檜皮葺の寢殿らしいものがあるが、入母屋造である。

入母屋は大棟の左右兩端に搏風があつて、更に其下に流があるから誠に格好がよい、四阿の屋宇の單調な缺點がない、故に武家のつくつた寢殿作りと稱するものはすべて入母屋ならざるはない、京都の祇園神社は平安朝の寢殿作りであるが、七間四面を母屋に取つて棟は七間の長さがあり、四方に一間の庇があるから自から入母屋である、とにかく入母屋作くりは古くからあつて、飛鳥時代既に瓦葺の大建築として我國に築造されたのである、平安京ではこれを檜皮葺にもし、或は茅葺にもしてゐた。

故に今日、茅葺入母屋で特別保護建築物たる國寶を到る所で見る、例令ば兵庫縣城崎町温泉寺本堂の如き、醍醐三寶院の純淨觀これは五間五面の茅葺入母屋である、又新潟縣南魚沼郡浦佐村普光寺毘沙門堂とか東京荏原郡碑衾村碑文谷の圓融寺本堂のごとき其例である、寺の本堂の入母屋である

のはこんな特別保護建造物でなくとも普通の田舍寺にいくらでもあつて、それは、民家と同樣な茅葺入母屋である、勿論民家では制令があつて軒下に斗拱をおき、高欄かまち等をつけることを禁じてゐたから、寺宇の堂々たるには及ばないけれども、茅葺の入母屋といふものは、殆んど日本の田舍一般に廣く分布するのみならず、太平洋の西岸に一般化されてゐるといつても差支がない程ポピユラーなものである、棟につける飾が、或は置千木であり、或は瓦の箱棟であり、或は竹、或は杉皮或は針目覆であり、

第十八圖



南桑馬路中川小十郎氏邸　入母屋農家

と種々あるが圖は南桑田郡馬路村の中川小十郎氏邸で、西園寺公が維新の際に鎭撫使として、山陰道に向はれた際に宿所となつた史蹟である、元祿時代の普請で、椽側に

明和二酉年
奉轉讀大般若經六百軸家内安全祈所
正月吉祥日

（長一尺五寸二分、巾二寸五分）

の木札がかゝつてゐるから、可なり古い家である、屋敷が千三百坪もあつて欅の森の中に聳えてゐる、七間四面の平入々母屋の姿は慥かに田舍鄕士の誇りとするに足るものがある、圖に見る瓦の庇は近年の補修である、

龜岡附近まで南へくると「まや」といふ妻入が增加するが龜岡から以北には街道筋の外には妻入がなく、すべて平入である、しかし圍部からさき觀音峠を越えると、須知町に妻入が多く、同町市森區には古い妻入の部落がある。妻入が古く市街地及田舍にでき平入が後に廣い田舍を占めたことの證になると思ふ、近江の平野も南及西の方共何れも平入が多く、長濱平野に入ると妻入が增加する。

山城ではこの入母屋の搏風は主として丸竹を斜に交叉した抓格子であるが、丹波ではこれに板が張つてあり、定紋が彫つてあるのがあり、白い壁にしたのも見うける、尤も簡單な入母屋では、抓格子も何も無い、それは家々の格式といふものがあつた時代の名殘で、南桑龜岡小學校長桂信次郎氏所有の古文書に左の如きものがある、

寛政二戊年八月御觸書、(龜岡藩)

前略但村方に於て建家又は倍普請等いたし候節破風揚候はゞ其村方庄屋肝煎五人組頭は勿論村方のものへ遂熟談差障候節無之候はゞ右村役人ども並に百姓總代として同株、並他株のもの一兩人衆印形差加へ破風揚候本人より可願出候、

これを見ても、この入母屋の破風といふものが、容易ならぬものであることがわかるであらう、他の地方にも同樣の習慣のあつた例も多いと信ずる。

附記

座右にあるCountries of the worldの繪を一々見てゆくと世界の屋根では切妻が尤も分布がひろく、球上到る所に存しついでは四阿が廣く分布してゐるらしい、中央亞米利加のマヤ族の住宅も草葺の四阿でありパナマの土人をはじめ、南洋サモアの住宅又はヒリッピン、マニラ、ボルネオ、フイジー等の土人の住宅にもそれが多く、勿論歐洲文明國の民家にも四阿があるが、入母屋に至つては、東洋及南洋に限られてゐるらしい、馬來諸島のテルナト、ナウル島又は南洋ニウヘブリデス島の土人の家をはじめ暹羅の盤谷、印度支那等に於て、精粗の別はあるがこの入母屋を見るのである、然して其尤も優秀なものは支那朝鮮及日本の殿堂に於てのみ之を見るが故に、予はこの優美な入母屋を以て極東の屋根だと考へる、而してこれを中央亞細亞の陸屋根、西方亞細亞の圓屋根から區別し得られると信ずる、即ちこれを附記として識者の叱正を仰いでおく。

◎大正十四年本邦港別貿易額比較

（貿易額合計一億圓以下省略單位千圓）

神戸	輸出	七三五、九三四	大阪	輸出	五四〇、六七三	門司	輸出	三三、九三〇
	輸入	一、三〇一、四四〇		輸入	三〇六、三六八		輸入	九三、〇九七
	計	一、九三五、三三八		計	八七六、〇四一		計	一二七、〇二七
横濱	輸出	九〇〇、七三六	名古屋	輸出	四八、八九〇			
	輸入	六二〇、二五四		輸入	七一、三四〇			
	計	一、五二一、〇二三		計	一二〇、二三〇			